

本調査区は平城京左京三条二坊六坪にあたり、昭和50年に平城宮跡発掘調査部が調査を行なった区域の北西に接続するところである。前回の発掘で六坪に園池があり、これを囲むように堀がめぐり、池の西側には東山を借景として池をのぞむ建物群が配置されていたことが明らかになり、出土した木簡から、天皇家に関連の深い遺跡であることが推定された。

今回の調査は園池の北側に走る東西堀から、三条条間路(現、大宮通)までの地域で、発掘は11月21日から開始しており、調査面積は約1,100㎡である。

検出遺構

本日までに検出された遺構は、建物5棟、溝2条、井戸、土壇などである。

SB 01—調査区の中央部にある、東西桁行5間、南北梁行3間で、南側に廂をもった東西の建物である。柱間9尺、柱穴の大きさは、一辺約1mで、柱根の残るものがあり、その径は一尺二寸をはかる。

SB 02—東側の柱列が調査区の西端で検出された。SB 01と柱筋をそろえてならぶ東西棟の建物で、同じく南廂を持つ。柱間9尺

SB 03—SB 01の東南にある南北桁行5間、東西梁行2間の南北棟で、柱間は南北桁行8尺5寸、梁行7尺

SB 04—梁行2間、桁行5間以上の東西棟で、柱穴の掘方は大きいもの

で1.6mをはかる。

SB1552 前回の調査区から続く東西棟建物で、新たに2間分検出した。柱間10尺で、建替がある。この建物の内部には5尺の間隔でならぶ小さい柱穴があり、棚の施設があったと考えられる。

SD 01 SB 01の柱穴と重なって検出された南北に走る溝で、柱穴より古い時期のものである。

SD1545 三条条間路に面する築地の内側の溝と考えられる東西溝である。巾は60cmほどで、素掘のもの。

出土遺物

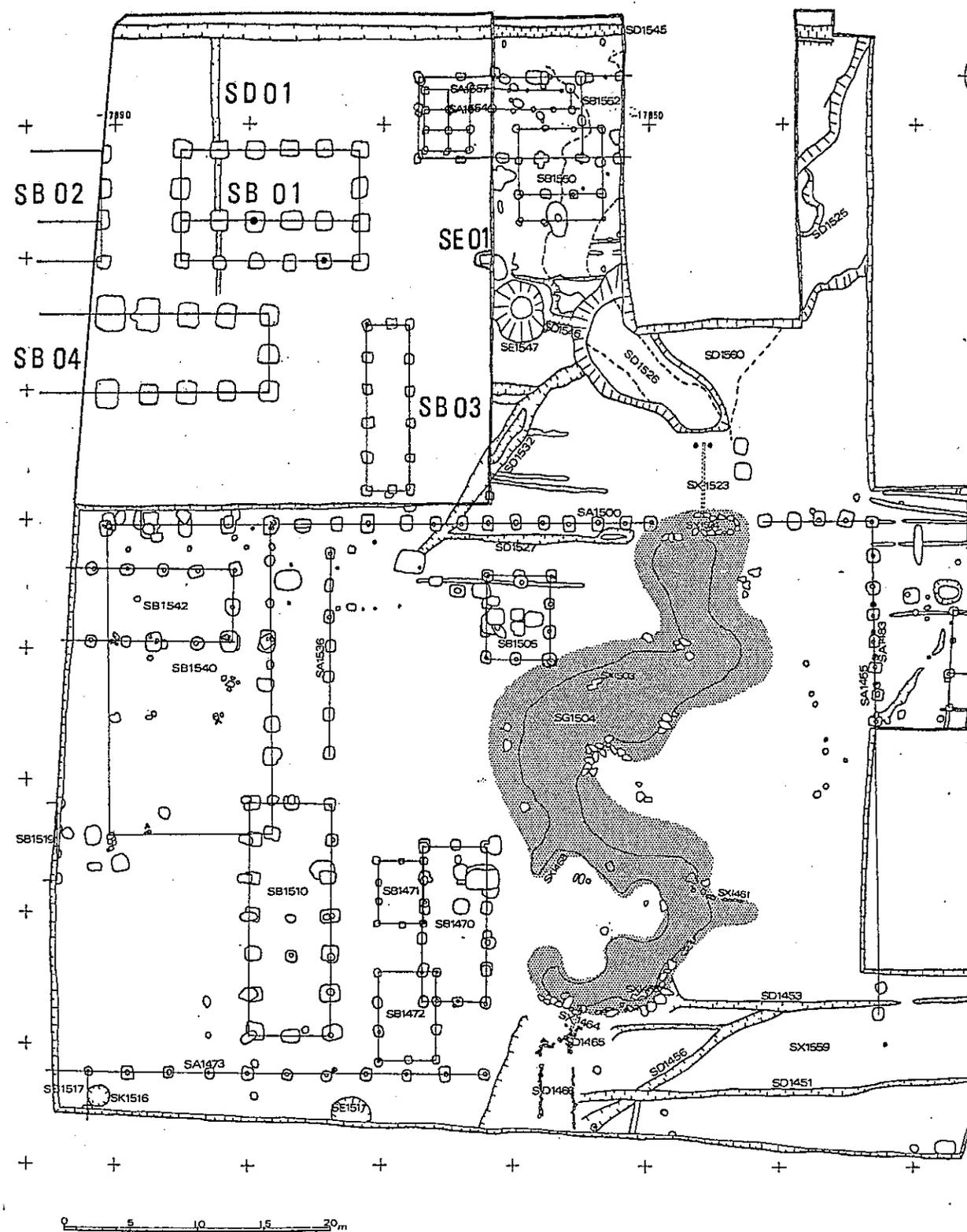
調査区全域から土器類、瓦類が出土している。土器はSD1545から多くの奈良時代の土師器、須恵器が、瓦類では軒瓦が24点(軒丸瓦12点、軒平瓦12点)出土している。瓦のほとんどが、平城宮と同範のものであることは注意される。平城宮出土軒瓦の編年によるⅡ期(養老5年~天平17年)のものが多い。

まとめ

今回の調査をふくめて六坪の約35%が発掘されたことになり、坪内の状況をつかむための重要な資料となる。今回検出した遺構は、園池を囲む堀(SA 1500)より北側の区域であり、大きく2時期にわかれる。前半期の建物配置は、二棟の南廂をもつ東西棟を中心にして、南北棟が東南にならぶ配置をとっている。この建物配置は、園池を中心にして堀で囲まれた区域とは、同じ坪の中でも性格の異なったものと思われる。後者が、曲水宴などを行なう公的な宴遊の場としての性格をもつものに対して、この坪の政所ないし館的な性格をもつ建物配置

である。後半期は、堀内の礎石建物と柱通りのあう東西棟が建てられ、前半期と異って堀内と一体的な空間構成となる。

本調査により、坪内の地割と、その性格付けに関して新しい知見が得られ、坪の復原にとって貴重な資料が得られたことになった。



P.L.1 6AFI-PQ区遺構実測図